

Jヴィレッジ一部再開

中学生が記念試合



スタジアムの天然芝グラウンドで中学生チームが対戦した記念試合

# 復興へキックオフ

## Jヴィレッジの経過

- 1997年7月 ▶ 国内初のサッカーナショナルトレーニングセンターとして開設
- 2002年5月 ▶ サッカーの世界大会で、アルゼンチン代表がキャンプ
- 11年3月11日 ▶ 東日本大震災と東京電力福島第1原発事故で営業中止。その後、東電が事故対応の拠点として使用
- 16年11月 ▶ 事故対応拠点としての役目が終了
- 18年7月28日 ▶ スタジアムやホテルなど主要施設で営業再開
- 19年4月 ▶ 全面営業再開予定



東京電力福島第1原発事故で対応拠点になったサッカー施設、Jヴィレッジ(福島県楡葉町、広野町)が28日、7年4カ月ぶりに一部施設の運営を再開した。交流人口の拡大につながる地元への期待は大きく、「復興のシンボル」の役割を背負う。(28面に関連記事)

人工芝グラウンド全9面のうち6面と、新設1-7室を含む全200室の宿泊施設など。施設の約8割が利用可能になった。

収容規模5000人のスタジアムで式典があり、運営会社社長の内堀雅雄福島県知事が「どんな困難も克服できる希望の光を国内外に発信する拠点になる」と述べた。東日本大震災や西日本豪雨の犠牲者を悼み黙とう。震災が起きた午後2時46分、ともに中学生によるクラブチーム「Jヴィレッジスポーツクラブ」と県選抜チームの記念試合を開始した。

スタンドで応援したスポーツクラブメンバーの広野中2年坂本翔さん(13)は「新しい歴史が始まる感じがした。素晴らしいグラウンドでいいプレーができるように練習したい」と話した。

県は整備中の全天候型練習場の利用を9月8日に始

めると明らかにした。全面再開は来年4月の予定。震災前の年間50万人を上回る60万人の来場を目指す。

1997年開設のJヴィレッジは東電が建設し、県に寄贈。原発事故後は東電が作業員の駐車場や社員宿泊場所などとして使った。2016年11月で利用をやめ、芝の張り替えや建物改修を進めてきた。